「国語教育研究」第五十八号（平成二十九年三月刊）

高等学校における小説の読みの学力評価のあり方

――評価問題による検討――

間瀬茂夫
河野智文

一　問題設定

近年、学力評価に関する考え方は大きな展開が見られる。高次の学力について、より現実的な文脈で、できる限り客観的な評価を行うオーセンティック評価（真性の評価）の考え方がさまざまな水準において広がってきた。ＯＥＣＤによるＰＩＳＡや文部科学省による「全国学力・学習状況調査」のＢ問題、さらに各県の公立高校入試問題などが先導し、従来は、育成のための指導はしていても評価が複雑なため、客観的な方法で評価しようとしなかったような能力について、課題や条件を工夫し、何らかの基準を設定して評価する試みがなされるようになった。

こうした状況を受け、本研究では、高等学校段階における読むことの主要な領域、すなわち評論、小説、古文、漢文の各領域を対象として、高次の読解力の評価のあり方について検討することを研究の目的として設定した。これまでに、研究全体の構想について拙稿等において論じるとともに、評価問題および評価指標（ルーブリック）を開発し、ハンドブックとしてまとめた。[1] 本稿では、小説の読みの領域について、高校生への調査の結果を基に報告を行う。[2]

二　小説の読みの評価問題の開発

（一）読解力および評価問題の枠組み

高次の読解力を措定し、評価問題や評価方法を開発するに際しては、いくつかの読解モデルを組み合わせ、四つの読みの領域に共通する評価のための枠組みを次のように設定した。

①読みの構えを問う…本文を読む前に、読み手の既有知識を用いて推測を行うことでテクストに関わる力を問う。
②本文を問う…本文に明示的な情報・内容を理解する力を問う。
③テクスト世界を問う…非明示的な内容を推論・解釈し、テクスト世界を理解する力を問う。
④書き手と読み手の関係を問う…テクストにおける表現方法・技

法やレトリックなどの効果を分析し、評価する力を問う。
⑤テクスト世界と現実世界の関係を問う…テクスト世界における問題と読み手が存在する現実における問題とを関連させて考える力を問う。

これらのうち、④と⑤を高次の読解力の中核ととらえた。

(二) 問題文について

問題文については、武田泰淳「信念」を用いた。武田泰淳（一九一二～一九七六）による「信念」は、「オール読物」一九四九（昭和二四）年一〇月号に発表され、一九五四（昭和二九）年五月、エッセイ集『人間・文学・歴史』（厚文社）に収録された。[3] さらに、〈筑摩叢書〉五九『新編人間・文学・歴史』（一九六六年六月）にも収録されている。

教科書への収録[4]は、三省堂『中学校現代の国語3新版』（一九七八年使用開始）が最初で、その後『現代の国語　新訂版3』（一九九〇年使用開始）まで連続して収録されている。高等学校では、三省堂『明解国語2』（一九九五年使用開始）と、明治書院『精選国語総合』（二〇〇三年使用開始）に収録されている。

作品は約千字の短編で、戦争に敗北して帰郷し、もはやぶざまな姿になった自身の銅像を堀に沈めた「将軍」を、その将軍の指揮していた師団に入隊した息子の母親（老婆）が、将軍本人とは知らず突き飛ばす、というものである。息子の戦死公報は届いているが老婆はそれを信じず、「あてになるのはこのおかただけですから」と将軍を「偉いお人」として崇拝、信頼していたのであった。

「傲然と町を見下ろ」す銅像の将軍と、「憔悴していた」実際の「元将軍」との対比や、「青年たちの手で打ち倒され」「打ち捨てられてあった」銅像が汚れ、ぶざまになっていく展開、一方将軍への崇拝と息子の生存を信じ続ける老婆の心情など、小説読解の基本となる「対比」や、「変化」「一貫性」がわかりやすくあらわれている。状況とその転換および、それらと人間との関わりを描いているという点でも、小説教材の基本的な要素を備えていると言える。

調査に用いた本文は、教科書初出の『中学校現代の国語3新版』（一九七八年使用開始）に基づいた。この教科書では「学習の手引き」として、次のような学習課題が設定されている。

○それぞれの登場人物に対して、どう思ったかをメモしておこう。

一　将軍の気持ちの動きを、次の点から考えてみよう。
　1　故郷へもどって自分の銅像を見た時。
　2　打ち捨てられた自分の銅像を見た時。
　3　将軍やせがれのことを語る老婆のことばを聞いた時。
二　将軍は、なぜ自分の銅像を堀の中へ落としたのか。
三　老婆は、なぜ将軍の背を突いてののしったのか。
四　「信念」という題名について話し合ってみよう。

本調査においては、先述した読解モデルにしたがって、設問を作成した。実際の設問については、次節に評価指標とともに示す。

（三）調査の概要について

①調査の目的・対象・時期

高校生への調査を通して、開発した評価問題の妥当性を検証するとともに、得られたデータをもとに評価指標を作成し、高次の小説の読みの学力の現時点での傾向をとらえることを目的とした。対象は、広島県内の中位に位置づけられる公立高校の一年生二クラスで、実施時期は、二〇一五年度三学期（三月）である。

②調査の方法

調査時間は四〇分程度とした。調査の実施にあたっては、これまでのいわゆるテストとの違いについて、評価問題のはじめに次のように記して、学習者の理解を得た。

この調査は、これまでの模擬試験などのテストでは測りにくい、文章を読解して表現する力を確かめるためのものです。

三　評価問題の実際と調査結果およびルーブリックの設定

（一）設問ごとのルーブリックの設定

調査を通して得られた回答をもとに、「採点基準」とは異なる、思考過程の違いを表すような評価指標（ルーブリック）を設問ごとに作成した。回答例とともに以下に示す（回答例は記述のまま引用した）。なお、無回答は、集計を行ったが、各指標には含めていない。

問一　これから「信念」（作・武田泰淳）という小説を読んでもらいます。この小説は、日本が第二次世界大戦に敗戦した後の、一九四九（昭和二四）年に発表されたものです。あなたは、「信念」という題名から、どのような内容を予想しますか。

【問一の分類と回答例】※この設問の回答については、段階的なものとして考えなかった。

分類	回答例
復興・復活	例）私は、作者が体験した、あるいは作者が、かかわったことだと思います。「信念」ということから、戦後の貧しさをこういう風に乗り切った、みたいな事が書かれていそうです。
戦後の思い	例）どんな困難が自分におとずれようとも、自分がある事を達成するまで諦めずに生きていくような物語。敗戦した後の話だから、一生懸命生きるという信念みたいなことが書かれているのではないのだろうかと思う。
戦争の悲しさ・不戦の誓い	例）もう絶対に戦争なんてしてはだめだという内容。
戦争への信念	例）何か強い思いを感じます。第二次世界大戦に敗戦し、自分が信じてつらぬき通して来た強い思いが本当にあっていたのだろうか、戦争をしていた自分がまちがっていたのだろうかという内容だと思った。

戦争中の思い	例）戦争中の日本の状況に対して、作者の感じたことや、強い思いが書かれていると思う。
信念の一般的意味	例）誰かに否定されたとしてもゆらぐことのない強い意志。また、流儀。

問二　傍線部に「ある日、銅像は青年たちの手で打ち倒された」とあります。青年たちが将軍の銅像を打ち倒したのは、どのような状況の変化があったからでしょうか。説明してください。

【問二のルーブリックと回答例】

水準	指標
2	戦争に負けたことについて、状況や経緯にも触れて、述べている。 例）戦後から日が経ち、彼の帰国も公報もないため、多くの人が彼から興味を無くし、銅像があっても意味が無いという状況。
1	戦争に負けたことについて、明示的に述べている。 例）銅像の人物は元将軍で偉い人だったけれど、戦争に負けて、将軍という立場ではなくなったという変化。
0	誤答。戦争に負けたことについて、明示的に述べていない。 例）銅像は元将軍であり、将軍が変わった今、この銅像がある意味がなかったから。

問三　この小説の展開を、次のような図に表してみました。この図を見て、後の問いに答えてください。

※図と本文を照らし合わせながら考え、以下の問いに答えてください。（本稿では図は省略した。）

（1）図の中の（A）に将軍の内面を書き入れるとしたら、どのように説明しますか。（A）に書き入れることばを記してください。

【問三（1）のルーブリックと回答例】

3	銅像を堀に沈めることを、自身の責任の隠蔽と関連させて説明している。 例）該当なし。
2	銅像を堀に沈めることを、過去の自己を否定するものとしてとらえている。 例）今でもずっと戦前のように町の者からしたわれたいのに、誰も憔悴した自分には気付かず銅像まで壊された。どろしぶきで汚れている自分なんて見たくもない。
1	叙述をほとんどそのまま抜き出している。 例）まるで自分が裸で地面に転がり、さらしものになっている気がした。
0	誤答等。　例）なし

（2）老婆のセリフには、どのような特徴がありますか。その特徴は、小説の中でどのような効果をもっていますか。説明してください。

【問三（2）のルーブリックと回答例】

4	3	2
作品の全体構造の分析をふまえた老婆のセリフの表現の分析から、将軍の責任を追及する問いとなっていることについて述べている。 例）将軍をとても尊敬というか信仰しているようである。そのため、将軍は嫌でも以前の自分と今の自分を比較してしまい、将軍の行動を左右させている。	老婆のセリフが、将軍の責任を追及する問いとなっていることをとらえているが、表現の分析が十分ではない。 例）老婆は何があっても将軍のことを信じていて銅像が打ち倒されても拝みに来るほど将軍が生きていれば息子も生きていると思っていた。将軍は自分のことを信じている人を前にして自分は生きているが老婆の息子が死んだということを自分のことがばれないようにと将軍の心の変化があった。	老婆のセリフの特徴について表現の分析を行いながら、老婆の人物像・心情をとらえているが、将軍への働きかけについては、述べられていない。もしくは将軍への働きかけについては記述が不十分。 例）とても落ちついていて、とても丁寧であるが、像を落としたときのセリフはピリピリしていて、言葉が丁寧でなくなったという特徴から、将軍のことをとてもうやまっていて、神様のように扱っていた将軍を落とされたことを心の底からうらんでいることがわかる。

1	0
老婆のセリフの特徴から、表現の分析を示すことはなく、老婆の心情・人物像をとらえている。もしくは、表現の分析が十分ではない。 例）将軍の師団に入っていたむすこが帰ってくることを信じていて、老婆の悔しさを引きだしている。	誤答等。　例）なし

（3）　将軍と老婆の行為や内面は、どのようなところに違いがありますか。「信念」ということばを用いて、説明してください。

【問三（3）のルーブリックと回答例】

4	3
主題と関わらせて説明している。 例）将軍はいままで自分が英雄のようにみんなに思われていたが敗戦で急に犯罪者みたいなしうちを受けて昔の自分を消そうとしていて自らの責任もまともにはたしていないが老婆は何があっても他の人がその将軍をどう思おうとも自分の信念をまげずに信じているので将軍と老婆の信念の違いは他の人や世間に左右されるかどうか。	将軍の信念の変化は説明できているが、主題と関わっていない。 例）将軍は始めは銅像の様に傲然とした姿だったが、みんなからしたわれなくなった瞬間、自分の銅像をおとしたり、信念が変わっているが、老婆は始めから終わりまでずっと将軍のことをしたい続けるという信念は変わらなかった。

0	1	2
誤答等。　例）なし	「2」に比して説明不足。あるいはどちらか一方の説明にとどまっている。 例）将軍は絶ぼうのイメージだが、老婆は息子が生きているという強い信念をもっている。	両者の並列的な説明にとどまっている。 例）将軍には、軍人として、戦いで負けたことへの恥じを周囲にさらしたくないという信念を持っており、老婆には、自分が死ぬまでこの人を尊敬し続けようという信念がある。

問四　次の、Aさん、Bさんの発言を読んで、後の問いに答えてください。

Aさん　「将軍は卑怯（ひきょう）で、老婆は偉いと思う。」

Bさん　「いや、将軍の取った行為は理解できる。老婆の方が愚かだと思う。」

（1）　あなたの考えは、AさんとBさんのどちらに近いですか。括弧にAかBを記入してください。

あなたの立場…（　　）さんに近い。

（2）　将軍と老婆に対して、あなたと逆の見方をしている人に反論するとしたら、あなたはどのような意見を述べますか。将軍、老婆のそれぞれについて説明してください。

【問四のルーブリックと回答例】

0	1	2	3	4
誤答等。　例）なし	作品の内容にふれず、自己の価値観のみを提示している。 例）息子のことを気になるのは、母親としてあたり前だし、毎日毎日息子のことを考え、拝んでいるのは偉いと思う。	作品に沿いつつも、判断の基準が自己の価値観にある。 例）私は、将軍は自分の行った行動に対して責任がもてていないと思う。例え、嫌われてもその現実を受け止め逃げず向き合うべきだと思う。	作品および作品の主題に即した価値観を提示している。 例）将軍の取った行為は理解できるとあるが、将軍は自分一人の考えだけで銅像を堀の底へ落とした。だから、自己中心的な思いで老婆の息子に対する思いを考えずに取った行動であると思う。	作品の主題に迫った説明をしている。 例）該当する回答なし。

問五　文学作品では、時代と、人間の生き方との関わりが描かれることがあります。この小説では、そのことがどのように描かれていますか。説明してください。

【問五のルーブリックと回答例】

4	3	2	1	0
作品中の人物の人物像や人物の表す価値観を、ある時代を代表する人間像や価値観としてとらえ、それを作品の主題として、作品の構造をふまえて述べている。 例）該当する回答なし。	表現や作品構造の持つ効果の分析が行われ、それらと主題との関係について述べている。 例）将軍の自分と向き合わずに逃げている生き方と老婆の将軍を信じている生き方が、お互いそれぞれの「信念」に従っている。また堀に銅像を落とした将軍を突き飛ばすことで人間の生き方との関わりが書かれている。	作品の大まかな構造の把握をもとに、一般的なテーマについて述べられている。 例）戦後、敗戦したことで変わった考えに流されてしまった人と、それでも信念を曲げなかった人、それぞれをどういう風に思うかが描かれている。	作品世界の出来事や人物の心情、表現の特徴が作品のテーマと十分に結びつけられないままで述べられている。あるいは、表面的な作品構造やテーマの記述にとどまっている。 例）戦争に負けてしまい、堂々と表へ出ることができなくなった。	誤答等。　例）なし

（二）ルーブリックによる評価の集計結果

調査の集計結果は、次頁に掲載した表①から表⑦の通りである。

四　考察

（一）人物、テクスト世界を問う設問の分析と考察

問一の物語の予想については、今回は分類にとどめ、水準としてはとらえなかった。

問二の物語の基本的な枠組みである敗戦については、67・6％（レベル1と2の合計）が読み取っていたが、そのことを明示的に記述していない回答も28・6％見られた。

問三（1）の小説の展開を表した図の「将軍の行為・内面」を補充する問題については、自身の銅像を堀に沈めるという将軍の決断と行為を、自己の過去の責任を隠蔽しようとするもの（レベル3）として解釈することを期待したが、該当なしであった。「責任」には至らないが、「過去」の否定として解釈したもの（レベル2）が4名（5・2％）、大部分（68名、88・3％）が、叙述をほとんどそのまま抜き出したもの（レベル1）にとどまった。

「1」と「2」の差は、叙述の表現を超えて人物の内面を想像し表現しようとしたかという点にある。ほとんどの生徒が、自らの解釈は加えず、叙述の該当箇所を抜き出すことで、「内面の説明」ができた、と考えている。「将軍の内面を書き入れるとしたら」という条件や、「どのように説明しますか」が本文の叙述の抜き出しではないことが、よりわかりやすく伝わるための設問（問い方）の改良も、課題になると思われる。

問三（3）の複数の登場人物（将軍と老婆）の行為および内面の

相違を説明する問題については、両者の相違を主題（信念）に関わらせて説明しているものをレベル4としたが、該当したのは1名のみである。「（将軍は）昔の自分を消そうとしていて自らの責任もまともにはたしていない」、「将軍と老婆の信念の違いは他の人や世間に左右されるかどうか」をレベル4の評価の根拠とした。レベル3は、将軍の変化にふれているものとした。「将軍は変化しているが、老婆は変わっていない」という形式のものである。これも、3名にとどまった。

多くは、将軍と老婆を並列的に述べているもの（レベル2、33名、42・9％）や、並列しているものの不十分な説明にとどまって

【表】説問ごとの評価のクロス集計表

表①　問1

		問1						合計
		1　復興	2　戦後の思い	3　不戦	4　戦争への信念	5　戦争中の思い	6　一般的な信念	
合計	度数	20	14	10	10	14	9	77
	%	26.0%	18.2%	13.0%	13.0%	18.2%	11.7%	100.0%

表②　問2

		問2				合計
		レベル0	レベル1	レベル2	無解答	
合計	度数	22	35	17	3	77
	%	28.6%	45.5%	22.1%	3.9%	100.0%

表③　問3（1）

		問3（1）				合計
		レベル0	レベル1	レベル2	無解答	
合計	度数	4	68	4	1	77
	%	5.2%	88.3%	5.2%	1.3%	100.0%

表④　問3（2）

		問3（2）					合計
		レベル1	レベル2	レベル3	レベル4	無解答	
合計	度数	9	46	16	2	4	77
	%	11.7%	59.7%	20.8%	2.6%	5.2%	100.0%

表⑤　問3（3）

		問3（3）					合計
		レベル1	レベル2	レベル3	レベル4	無解答	
合計	度数	32	33	3	1	8	77
	%	41.6%	42.9%	3.9%	1.3%	10.4%	100.0%

表⑥-1　問4（1）

		問4（1）			合計
		A将軍	B老婆	無解答	
合計	度数	33	41	3	77
	%	42.9%	53.2%	3.9%	100.0%

表⑥-2　問4（2）将軍

		問4（2）将軍				合計
		レベル1	レベル2	レベル3	無解答	
合計	度数	50	18	3	6	77
	%	64.9%	23.4%	3.9%	7.8%	100.0%

表⑥-3　問4（2）老婆

		問4（2）老婆				合計
		レベル1	レベル2	レベル3	無解答	
合計	度数	48	13	10	6	77
	%	62.3%	16.9%	13.0%	7.8%	100.0%

表⑦　問5

		問5				合計
		レベル1	レベル2	レベル3	無解答	
合計	度数	22	33	10	12	77
	%	28.6%	42.9%	13.0%	15.6%	100.0%

いるもの（レベル1、32名、41・6％）であった。両者の「信念」の相違のもつ意味のところまで解釈しようとしたものは、ほとんどなかったと言える。初読の段階で迫れるような水準の要求ではなかった、と言える。授業で読解していくうえでの重要なポイントであり、初読では気づけていない、読みの深まりをうながす可能性をもったところであるとも言える。「どのようなところに違いがありますか」という問い方にも、改善の余地があるものと考える。

問四は、自身の人物評価を定め、立場を異にする相手に反論するという設問である。（1）では、将軍非難（A）の立場をとったものは33名、将軍擁護（B）が41名であった。「将軍について」と「老婆について」とを分けて回答することにしたが、ルーブリックは同一で、レベル4は、「作品の主題に迫った説明をしている」とした。しかし、該当する回答はなかった。レベル2（作品に沿いつつも、判断の基準が自己の価値観にある）とレベル1（作品の内容にふれず、自己の価値観のみを提示している）で8割程度と多数を占めた。つまり、作品に示された見方ではなく、自身が予めもっている（素朴な）価値観で判断を下している、ということである。「初読」の傾向として、このことが強く現れている。レベル3（作品および作品の主題に即した価値観を提示している）は、作品と関連させての説明を想定したが、説明が不十分なものも目立った。

回答の形式の傾向としては、「あなたと逆の見方をしている人に反論するとしたら」という条件を提示しているものの、自説の説明（強調）のみに終わっているものがほとんどで、反論という設定で異なる立場の解釈に気づかせようとするねらいは、達成できなかった。対話・対立の場面がより具体的に意識できるような設定や提示を考える必要があろう。そのことから、「〇〇と考えるのもわかるが、しかし…」のような譲歩の形式での回答がきわめて少数で、「逆の見方」を意識することによる生徒の見方の変化については知ることができなかった。これも、設問の形式に関わってくることであろう。

あらためて問いを検討してみると、「（Aさん）将軍は卑怯で、老婆は偉いと思う」が、初読の第一印象に近いもので、「（Bさん）いや、将軍の取った行為は理解できる。老婆の方が愚かだと思う」が、再読以降の、いわば「深い」解釈であると言える。その点で、AとBのいずれの立場を選択するかによって、読みの深さがあらわれるとも考えられるが、そこまでの分析には至らなかった。

生徒が初読でもった人物への印象に、異なる立場を提示し、再検討や相対化をうながしていくことは、やはり、授業を通してなされるべきことであり、自身の既存の素朴な価値観で人物を評価する読みが、作品を読む（くぐる）ことによって揺さぶられる、という授業の方向性や意義を、この結果は示唆しているのではなかろうか。

（二）表現分析を問う設問の分析と考察

①問3（2）セリフの表現効果を問う設問の考察

レベル2は、基準を〈老婆のセリフの特徴について表現の分析を行いながら、老婆の人物像・心情をとらえているが、将軍への働きかけについては、述べられていない。もしくは将軍への働きかけについては記述が不十分〉としたが、この回答事例は次のものであ

る。

22　自分の立場を少し大にして話している。戦後、敗戦した日本の様子をよく分かるような話し方。

25　「あの方が生きてござらっしゃれば、せがれも生きているでさ。あの方が死になさったら、せがれも死んでるでさ。」や、「なんてことをするんだ！罰当たり！」や、「あのおかたに対して、なんてまねをするんだあ、あのおかたに…」という言葉から、老婆は彼の事をとても尊敬し、銅像なしでは生きていけない生活をしていた事が分かる。

29　老婆のセリフはすべて元将軍をしたっている立場で書かれている。戦後どの人も元将軍をしたわなくなったが、老婆だけは今でもしたっているという事が分かる。

31　とても落ちついていて、とても丁寧であるが、像を落としたときのセリフはピリピリしていて、言葉が丁寧でなくなったという特徴から、将軍のことをとてもうやまっていて、神様のように扱っていた将軍を落とされたことを心の底からうらんでいることがわかる。

これらは、解釈の前提となる表現の分析と老婆の心情の記述が十分行われているが、セリフの効果の分析が老婆という人物の解釈にとどまるものであるため、セリフが人物の内面の表出である以上に物語の展開の軸になっている本作品においては、レベル2の評価にとどめた。こうした回答は、約6割（59・7％）を占める。

なお、レベル2の中で、「将軍への働きかけについては記述が不十分」と判断したものは、例えば次のものである

20　まるで誰かと話しているかのような話し方をしている。将軍のセリフはないけど、将軍と老婆が会話しているようだ。

これらに対し、レベル3としたのは、例えば次のものである。

6　昔の人ならではのなまりや、尊敬語などが使われている。小説の中で、時代をよくあらわすようになっているし、銅像の将軍に対して尊敬心を持っているのに、今の将軍に対しては違うという所も将軍の変化を示す効果をもっている。

10　将軍を強く信じており、このセリフは、将軍のことを信じていた全ての人の言葉としてとることができる。老婆だけでなく沢山の人が老婆と同じ意見を持っていることがわかってくる。

こうした事例から、評価指標を、〈老婆のセリフが、将軍の責任を追及する問いとなっていることをとらえているが、表現の分析が十分ではない。〉とした。

さらに、レベル4〈作品の全体構造の分析をふまえた老婆のセリフの表現の分析から、将軍の責任を追及する問いとなっていることについて述べている。〉に分類したのは、次の2例である。

7　初めは敬語で話していたけど、最後の方では方言になっていて、その像を壊したり落としたりした青年や将軍に対しての腹立たしさを強調している。また将軍の心情を変化させる境となっている。

69　将軍をとても尊敬というか信仰しているようである。そのため、将軍は嫌でも以前の自分と今の自分を比較してしまい、将軍の行動を左右させている。

これらは、十分にレベル4に達しているとは言えないが、レベル

3から4への移行がどのように行われるかをとらえる事例になると考えられる。いずれもセリフの効果の分析の枠組みが、老婆の心情解釈の枠から、将軍の心情やその変化との関係、さらには作品の展開や全体構造との関連においてとらえるものへと向かっている。

②問5作品の主題と構造との関連を問う設問の考察

問5の回答に対して、最も高い評価を与えたのはレベル3で、全10例（15・6％）である。例えば次のような回答である。

31　変わってしまった将軍と変わらない老婆を主として時代の流れや、人の思い、生き方について描かれている。みじめな姿になってしまっても、老婆は変わらず拝みにきたことと、将軍が像を落とし、その後の老婆の態度から描かれている。

54　将軍の活やくしていた時代は終わり、新たな時代が来ているのに、銅像があることで老婆はいつまでもそのことを考えていて、老婆は時代の変化についてこれてない。

56　戦後の時代と残された家族、帰国してきた将軍について、描かれている。大切な息子を失い、受け入れきれない家族と、自分が尊敬されていたが、憎まれる事実を知る元将軍が、銅像を通して分かるように描かれている。戦争というものがどれほど大きなダメージを与えたのかがわかる。

レベル3の指標は、〈表現や作品構造の持つ効果の分析が行われ、それらと主題との関係について述べている。〉とした。これに対して、レベル2としたのは、例えば次のような反応である。

39　第二次世界大戦後、もう諦めている将軍の立場の人と、まだ希望を持っている老婆の立場があり、自分がもし、そのような場面になったときに、自分は諦めるのか、諦めないかを考えさせるように描かれている。

14　戦争に負け、復興しつつある日本で、戦さに負け、帰ると居場所の無くなっていた将軍と、いつまでも、戦争で子どもを亡くしたことも受けいれられずにいる老婆がとりのこされていくような感じが描かれていた。

79　戦後という辛く苦しい時代の中で、それぞれ全く別の生き方をしてきた人間の思いや不安、期待などが交錯していく、というように描かれている。

これらの反応は、老婆／将軍という大まかな構造、もしくは「人間の思いや不安」といった一般的な概念による主題の把握にとどまっている。こうした事例から、レベル2の指標を〈作品の大まかな構造の把握をもとに、一般的なテーマについて述べられている。〉とした。レベル2には、33例（42・9％）が分類された。

レベル1は、例えば次のような回答である。

4　敗戦後、戦闘員は生きていれば負け犬、死ねば英雄だったと思います。その将軍は、位が高かったから、銅像があった、それは、将軍が死んだことを意味します。生きているとばれたら、これから、とても住みにくくなりそう。

13　昔、戦争のある時代に、将軍は無事帰国することができたが、老婆の息子と一緒に帰国できたわけではなく、将軍は老婆に会わす顔がなくなっている。老婆の信念を知り、なおさら、将軍は老婆に息子のことを伝えづらくなっている。

人物の行動や物語の中の出来事を要約するようなもので、22例

（28・6％）見られた。これらからレベル1の指標を〈作品世界の出来事や人物の心情、表現の特徴が作品のテーマと十分に結びつけられないままで述べられている。あるいは、表面的な作品構造やテーマの記述にとどまっている。〉とした。

レベル4は、〈作品中の人物の人物像や人物の表す価値観を、ある時代を代表する人間像や価値観としてとらえ、それを作品の主題として、作品の構造をふまえて述べている。〉としたが、これに分類されるものは、今回の調査では見られなかった。これに相当するものとして、稿者らは次のような解釈を行った。

大衆（青年）は、古い体制や価値観の崩壊、新しい体制や価値観の到来を受け入れ歓喜するが、それができず、捨て去ることのできない理想にわずかな望みを見出し、信念を貫く者が少なからずいる。そうした者の存在は、時代に乗じた自己否定によって過去の責任を逃れようとすることを拒絶し、責任を追及することになる。こうした立場の違いによる「信念」の持ち方の違いが、寓話的に表されている。

このような解釈は、四〇分という限られた時間の中で生成されるものではないのかもしれない。

五　研究の成果と課題

問3（1）および（3）、問4など、直接的に人物に関する解釈を求める問題以外の、問3（2）や問5など表現の分析や作品に対する批評を求める問題においても、人物の心情の枠において解釈を行う回答例が多く見られた。高校生に限らず、物語の理解は、どの発達段階においても、こうした人物や出来事の展開に沿った解釈が基盤となっているものと思われる。そうした理解から次の水準の理解への移行は、人物同士の関係や物語の展開から、象徴的な意味を見出す過程において行われるように思われる。

しかし、一方で、作品の象徴的な意味は、予め学習者が現実世界において持っている概念や価値観に置き換えられやすいことも見てとれた。テクストの表層的な理解やテクスト世界の理解と、そこに見出される象徴的意味の理解の間には、隔たりがあり、今回の調査においては、その隔たりを容易に超えられないという傾向が見られた。

作品の構造と象徴的な意味との往還が、より深い小説の理解には必要となると考えられる。しかし、それが短い時間において可能な思考であるかということは、再考すべき問題である。その隔たりは、短時間の評価によって測定される学力の差というより、ある程度の時間や期間をかけて実現する思考の深まりのプロセスを表すものとも考えられる。海外の学校段階修了資格試験（イギリスのGCSE）や国際バカロレアにおける母語（文学）の評価では、既習の文学作品について、分析や批評を行わせ、それを評価するような方法もとられており、我が国においても高次の読解力の評価のあり方として検討されるべきであろう。

また、本研究においては、小説の読みの学力評価のあり方として、設定した解釈やそれをよく表す命題にどれだけ近いかによって採点する、という方法ではなく、読みにおける思考の種類によっ

て、評価を行うための指標を提示することができたと考える。学習者の反応に見られたものとして指摘した読みの課題は、そうした指標を開発したうえで行った評価から得られたものである。

今後の研究としては、同じ評価問題で、いわゆる学力層によって回答の傾向がどのように異なるかを明らかにすることが必要である。さらに、教科書教材を用いた評価問題と評価指標を開発することで、授業などある程度の時間をかけた学習の過程を通して達成する解釈や読みの学力がどのようなものであるのかを明らかにすることも試みたい。

附記　本研究は、平成二四～二六年度の文部科学省科学研究費補助金の助成を受けた研究（基盤研究（B）「中等国語科における生産的な読み手育成のための読解力・授業力診断評価システムの開発」研究代表者間瀬茂夫、課題番号二二四三三〇二四六）の成果の一部である。小説領域の研究は、稿者らと山元隆春（広島大学）・川口隆行（同）両氏との共同研究として行われた。また、調査にあたっては、広島県高等学校教育研究会国語部会が主催する国語科授業づくりセミナー（代表小路口真理美）の参加メンバーの方々および勤務校の生徒さんたちに協力いただいた。記して感謝申し上げる。

注

1　拙稿「高等学校における高次読解力の評価のあり方―読解力評価問題の活用―」（『国語教育研究』第五六号、二〇一五年、二一九～二三〇頁）において研究の全体構想を論じた。また、『高校国語科高次読解力評価のためのハンドブック』（広島大学国語学力研究グループ編、二〇一五年、私家版）として研究成果の一部をまとめている。

2　古文領域の研究成果として次のものがある。

竹村信治「古文学習の課題―学力評価問題パイロット調査から（上）―」『論叢国語教育学』復刊第四（通巻九）号、二〇一三年、六五～七五頁

同「古文学習の課題―学力評価問題パイロット調査から（中）―」『国語教育研究』第五五号、二〇一四年、五五～六六頁

同「古文学習の課題―学力評価問題パイロット調査から（下）―」『論叢国語教育学』復刊第五（通巻一〇）号、二〇一四年、二九～四六頁

3　古林尚「解題」『武田泰淳全集　第二巻』筑摩書房、一九七一年

4　阿武泉監修『読んでおきたい名著案内　教科書掲載作品13000』（日外アソシエーツ、二〇〇八年）および同『読んでおきたい名著案内　教科書掲載作品　小・中学校編』（日外アソシエーツ、二〇〇八年）による。

（広島大学）
（福岡教育大学）